

回 心 体 験 と 年 齢 意 識

——19世紀アメリカの覚醒運動と老人——

平 井 康 大

序

宗教が持つ重要な機能の一つに、歴史の始まり、世界の成り立ち、そして未来の行く末を説明するというものが挙げられる。こうした展望なしには現世における苦しみや困窮の拠ってきたる所を解き明かすことはできないし、従って様々な悩みを抱えている人々を惹きつけることはできないからである。

苦しみの原因とその解決方法の提示の仕方は様々である。世界が一つの法則に従って機能しており、一切の苦しみは個人がこの法則に棹さしているからだと考えるか、それともこの世界を司る法則に内在するゆがみのために個人が苦しんでいる、と論じるかで全く宗教の様相は異なってしまう。前者は既存の社会制度への適応を要求するだろうし、後者は逆に社会の成り立ちそのものに対して変革を要求するだろう。特に後者のタイプの宗教では、目標とする最終的な状態、つまり歴史の終わりをユートピアとして表現することが多い。前者の一例である仏教では、輪廻の渦から解脱し得た理想状態を涅槃というきわめて個人的な状態として提示するのに対し、神と悪魔の戦いを通じて義なる人々が析出し、神の王国すなわちユートピアを築くとするキリスト教などは後者に属する。もちろん具体的な例を数多く検討すれば例外はいくらでもあり得る。仏教においても祇園精舎に始まる出家集団を一種のユートピア建設を目指したものと考えることができる。だが輪廻からの解脱に明確な期限を設けない仏教界では、現世の内

にもユートピアを実現させようという運動が目立たないことも事実である。

19世紀のアメリカ合衆国はその社会の変動とともに、キリスト教に根差した「ユートピア」を数多く産み出してきた。正確には、いくつかのユートピアの計画が競合したと言うべきだろうが、これらユートピアがどうしても直面する問題があった。老人の増加である。飲酒・奴隷制度といった社会悪と同時に、障害者や貧者、そして老人を排斥して共同体を形成することは可能だろう（それをユートピアと呼ぶかどうかはさておき）。それでも共同体の構成員は老いる。神の救済計画が成就した後、老人はどのように処遇されることになっていたのか。本稿では、宗教家が老人あるいは老齡が持つ社会的意義をどう捉え、それが彼らの理想とする世界観からどのような影響を受けていたか、19世紀前半のアメリカ社会を軸として、「老齡」観、「老人」観の変化を考察したい。この時期にアメリカのキリスト教会における回心体験のあり方が質的な変化を遂げ、それが加齢が持つ価値に大きな影響を与えたと考えるからである。

アメリカ人の年齢意識を文化史の立場から研究したトーマス・コール Thomas R. Cole はパーフェクショニズム（アルミニウス主義）の台頭が19世紀以来アメリカ人の若さ志向を形成したと考えている。伝統的にアメリカの主流教会は大きくプロテスタンティズムに分類されるが、この教会が誕生の際に前提としたカルヴィニズムとは逆に、人間は自己の救済を完遂する力を有していると考えるのがパーフェクショニズムである。コールによれば19世紀の前半、第2次大覚醒で活躍した説教師たちの多くは会衆に向かって一刻も早く完璧なキリスト教徒となり、救済を確かなものにするように要求した。この時、キリスト教徒としての再生の目印とされたのが回心体験の告白である。こうした要求に対して敏感に反応した会衆の多くが若者だったために、回心体験は基本的に若者の現象であり、老齡は回心の妨げである、と説教師たちに見なされるようになったことがアメリカ人の

年齢観を一変させた、というのが彼の論旨である¹⁾。

以下の章においては、まずアメリカで老齡・長命がどうとらえられているか、植民地時代にさかのぼって検討する。次に回心体験そのものの変化を考察し、最後にコールの論旨を検証すると共に、年齢意識の変革の状況証拠として提案を試みる。

第1章 老齡観の変遷

「老人」「老齡」が意味するところは時代・地域によって大きく異なる。現在先進工業諸国の多くで「老人」人口が増加しつつあるという言われている。日本では現在1899万人、全人口の15%強が65歳を越えており、この増加がピークを迎える2020年頃には全人口の4人に一人が65歳以上の「老人」に分類されるという²⁾。本稿の研究対象たるアメリカ合衆国でも同じ傾向が見られる。日本ほど急速ではないにせよ、1940年には7%に満たなかった65歳以上の人口比率が、2000年には13%、2025年には18%に達しようとしている³⁾。ここで「老人」を65歳以上としたのはもちろん年金給付開始年齢を一つの区切りとしたからにすぎない⁴⁾。ひとくちに「老人」といっても、昨今の議論は年金制度の維持を念頭に置いて、この増加する社会階層としての「老人」にいかに対処するかということに力点が置かれているようだ。

年金への依存を「老人」の指標とするこの習慣は、当然の事ながら確立してからまだ日が浅い。年金制度の誕生を待たねばならなかったことが一つ、もう一つには「引退」という概念が広く定着したのはやっと前世紀のことに過ぎないからである。「老人」と「引退」という2つの概念のどちら

1) Thomas R. Cole, *The Journey of Life: A Cultural History of Aging in America* (Cambridge: Cambridge UP, 1992) esp. 81-82.

2) 1996年9月14日総務庁発表。朝日新聞(1996年9月15日)3。

3) *Statistical Abstract of the United States*, 114th Edition (U.S. Department of Commerce, 1994) 24.

4) アメリカでは男性65歳、女性は62歳が年金給付開始年齢になる。

が先行して現れたかここで議論することはできないし、地域・職種・社会階層を無視してこれらの概念の発達の歴史を語ることは無意味である。ただし本稿の目的にかなり限りでジョルジュ・ミノワが著したヨーロッパにおける「老い」の歴史を一般化すると、「引退」が現れたのはヨーロッパ・ルネサンス期以降のことであり、それも一部の貴族あるいは聖職者階級にのみ許された、一種の贅沢であったことは念頭に置いておくべきだろう。戦う能力がなくなれば無価値と見なされた騎士、そして社会の大多数を占める各種労働者にとっては、ある人が何らかの生産活動に従事できる限りその人は「成人」であり、逆に従事できない人はむしろ病者、あるいは貧困者に分類される存在だった。現代における「老人」、つまりアメリカを含めたヨーロッパ文化圏において「引退」した人、そして労働に従事しないでもよい「老人」という社会階層が広く労働者間にまで認められるようになったのは、やっと19世紀になってからなのである。16世紀にユートピアを夢想したトマス・モアは老人に一定の権利と尊厳を保つため、終身労働を主張した。その彼でさえ、いかなる労働にも堪えなくなった老人は自殺して社会の負担となることを避けるべきだ、と考えていたのである⁵⁾。

従って、この小論には何度も「老人」あるいはそれに類する表現が使われるが、それは決して「65歳以上」とか「退職した人」といったような明確な分類によって示されるものではない。激しい肉体労働に従事した者は人より早く「老人」の仲間入りをするかもしれないし、居職・座職の者は最期を迎えるまで「成人」でいられるかもしれない。本稿での「老人」は、はなはだ漠然としたもので、「加齢のために仕事の量を減らさねばならなくなった人」、あるいは「日常の挙措に体力の衰えが現れている人」といった程度の表現でくくらざるを得ない。

5) ジョルジュ・ミノワ『老いの歴史：古代からルネサンスまで』（筑摩書房、1996年）202, 321, 183, 365など。

『老いの歴史』を通じてミノワが強調したことは、老齡、あるいは老人に対する態度に一貫した変化があったわけではない、つまり、古代社会の老人は現代社会の老人よりも敬われていたとか、現代社会の方が老人に対して寛容である、といったような一般化は不可能だということである。ミノワが辛うじて公式化できた傾向は、メロヴィング朝時代と中世初期の老人は貶められ、詩・演劇などで嘲られる存在であり、逆にローマ時代や16世紀の絶対君主制国家では老人が社会的に高い地位につくことが期待され、尊敬もされていた、ということである⁶⁾。しかしこれらの時期ですら、全ての人間が同じような老い方をしないことを考えれば当然だが、ミノワの公式には当てはまらない例に満ちあふれていた。

複雑多岐にわたるミノワの研究から唯一伺われる「老齡」観変遷の法則は、老人が法的に権力を持つ社会では老人が嫌われる傾向にある、ということである。法制史を繙いて、老人の権利が明確に保護されている社会ではしばしば老人が喜劇の題材にされていることをミノワは発見したのである。彼はこの傾向を社会の中堅をなす世代が老いてゆく世代に対して抱く苛立ちによって説明している。一家族の単位で考えた場合、ローマ時代のように家長の権利が終身制と考えられる社会では、息子は成人した後も長く家督権をもてない状態が続く。かくして、いつまでも若者のように装い行動する「父親」は、自分の老醜に気付かぬほど愚かで好色な人間として劇場に登場することになった⁷⁾。

第2章 アメリカの老人

(a) 北東部

ミノワの研究対象は17世紀以前のヨーロッパに限られているが、そこで示された知見は時間や地域を越えた示唆に富んでいる。彼の研究を踏まえ

6) ミノワ401.

7) ミノワ113,284-8.

つつ、アメリカにおいて「老齡」に対する人々の考えが大きく変わったと思われる19世紀前半に至るまで、アメリカで「老齡」や「老人」がどのように扱われていたか、アメリカ13植民地の北東部と南部からいくつかの例を挙げて、概略としたい。

まずピューリタンが建設に着手し、彼らの神学、文化、そして生活習慣までもが支配的であったニュー・イングランドから見てみよう。現在のマサチューセッツ州が中核をなすニュー・イングランドへの植民者たちは、英国の中でも主にブリテン島の東部、ノーフォーク、サフォーク、エセックス、ケンブリッジシャーなどの地方から移住してきている。社会階級から見ると大地主や親方職人層、つまり中産階級と思われる人々が中心であった。元来家族を単位とした定住志向の高い移民で、男女比は均衡しており、幼児死亡率は極めて高いものの、成人の平均余命は現代人並に高く、人口増加率は当時の社会としては高い⁸⁾。

アメリカ植民地時代及び建国初期のアメリカでの社会についての最近の研究によると、17世紀のニュー・イングランドで暮らしていた20歳の人間は、更に40年から50年の余命を期待できた⁹⁾。これは後述するアメリカ南部の平均余命に比べて長いだけでなく、彼らが後にしてきた当時のヨーロッパのそれをも上回るものだった。ただし当時のニュー・イングランド人の感覚はこうした統計上の事実とはかけ離れており、長命を非常にまれなものと考えていたらしい。マサチューセッツの教育者かつ神学者であり、人口動態の研究家でもあったエドワード・ウィグレスワース Edward Wigglesworth (1732-1794, Michael Wigglesworth の孫) が作成した “Life Table of 1789” によると、当時のニュー・イングランドにおける誕生時の

8) David Hackett Fischer, *Albion's Seed: Four British Folk Ways in America* (New York: Oxford UP, 1989).

9) Gerald F. Moran and Maris A. Vinovskis, *Religion, Family, and the Life Course: Explorations in the Social History of Early America* (Ann Arbor: U of Michigan P, 1992) 33.

平均余命は35.5年に過ぎない。これはもちろん乳幼児の死亡をすべて含めて計算した結果なのだが、子供が現代より遥かに高い確率で倒れていくのを目の当たりにしていた人々にとってウィグルスワースが算出した数字を平均寿命とみなす事はそれほど驚くべきものではなかったらしい。2度にわたって妻と死別したウィグルスワース個人にとっても重みのある結果であっただろう。それに加えて、会衆により強い宗教的熱情と回心を促すために、牧師たちが生のはかなさを実態以上に強調した事も推察される¹⁰⁾。

ピューリタン神学を三世代にわたって体現した「マザー王朝」の二代目、インクリース・マザー Increase Mather (1639-1723) が『神の年老いた僕の尊厳と義務』という著作の中で、長命を得ることの意義について述べている。マザーにとって長命は即ち神の祝福である。彼は聖書から老人あるいは長命をたたえる言葉を引用する。まず箴言20:29からは「若い人の栄えはその力、老人の美しさはその白髪である」、列王記上3:14からは「もしあなたが……私の道に歩んで、私の定めと命令とを守るならば、私はあなたの日を長くするであろう」を示し、「人がもし長命を恵まれるなら、その人の日を長からしめたのは神である If any man is favoured with long life, it is God that has lengthened his days.」であることを強調した。それ故

Considering the many dangers which attend men, not only by diseases, but by innumerable accidents, it is marvellous Providence that upholds a frail life to Old Age¹¹⁾.

10) Maris A. Vinovskis, "Angels' Heads and Weeping Willows: Death in Early America" (Unpublished. TS).

11) Increase Mather, *Two Discourses shewing, I. That the LORDS Ears are open to the Prayers of the Righteous. II. The Duty and Dignity of Aged Servants of the LORD* (Boston, 1716) 51-52.

（人が様々な病気のほかに、事故にも見舞われることを考えると、弱い人間が老齢まで生きながらえることは神の驚くべき恩寵である）

とマザーは考えたのである。逆に、神に背く者は「常に、とは言えないまでも、かなり高い頻度でその日を縮められるであろう the wicked shall have their days shortened, which indeed many times happen to be so, yet not always」とマザーは述べ、そこには悪人がしばしば善人よりも長生きをすることに対する疑問は見られない¹²⁾。

神が祝福として、あるいは神の教えに忠実だった報酬として人に老齢を与えるなら、老齢は「この世の富や名誉よりも大いなる祝福」であり、人はその両親や年輩の者には従わねばならないとマザーは考えた。それはまた、エペソ人への手紙第6章1—3節にあるとおり、目上の者に従った人自身が老齢に至る道でもあった。

Children obey your parents in the Lord, for this is right ; honour thy Father & Mother, which is the first Commandment with promise, that it may be well with thee, and that thou mayst live long in the Earth¹³⁾.

（子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことである。「あなたの父と母を敬え」。これが第1の戒めであって、次の約束がそれについている。「そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであろう。」）

更にマザーは老齢がもたらす祝福を家族や国にまで敷衍している。

And the removal of Aged persons out of the World, is, mentioned

12) Mather 50.

13) Mather 56.

as a Judgment, and a sad Omen to the Places where they had lived and served God. The Lord threatened His people that he would *take from them the Prudent & the Ancient*, Isai 3.2. And it is spoken of as an heavy Judgment on a Family, that none of that family should live to Old Age¹⁴⁾.

(この世から年老いた人々が連れ去られることは、彼らが暮らし、神に仕えていた場所にとって最後の審判であり、悲しむべき前兆と述べられている。神は《エルサレムとユダから》「占い師と長老」を取り去る、と人々に警告を与えた。イザヤ書3:2。家族の内誰一人として老齢に達しないという事態は、その家族にとって非常に重大な審判が下っているものとして語られている。)

別のところで「老化による衰弱は罪の産物である」と述べつつも、マザーは老いについて積極的な価値を認めようとしていた¹⁵⁾。もちろんミノワの知見を援用するなら、これは現実世界における老人の地位の低さを覆い隠そうとした努力だった可能性は否めない。だが、マザーが住んでいたボストンの北に位置する漁港グロスターの発達史によると、1730年代に入るまでは教会での礼拝、あるいはミーティング・ハウスでの集会の際の席順は年齢によって決定され、財産や社会への貢献度といった尺度は二次的なものとされていたという。マザーが『神の年老いた僕』を著していた頃には年齢よりも財産の方が席順決定に際して優先される傾向が明らかになってきていたと思われるが、少なくともこの時期に至るまでは人々が老人への敬意を目に見える形にしようとしていたことが伺えるのである¹⁶⁾。

14) Mather 57.

15) Mather 50.

16) Christine Leigh Heyrman, *Commerce and Culture: The Maritime Communities of Colonial Massachusetts, 1690-1750* (New York: Norton, 1984) 144-149.

ミノワの見解に従うならば、北東部入植者の多くが中産階級であり、労働に堪えなくなり「引退」してしまった老人をも養う余裕があったため、老人は老人としての尊厳を保ったまま余生を送れたことになる。

(b) 南部

アメリカ大陸における最初のイギリス領植民地が建設されたのは現在のヴァージニア州である。後に建国父祖の多くを輩出したこの地域は、気候のみならず入植した人々の構成でも、マサチューセッツを中心とした北東部とは大きく異なっていた。ヴァージニアへの植民者の多くはブリテン島の南部と西部、グロスター、デヴォン、ドーセットなどの地方の出身者だった。定住志向は低く、結果的に男が圧倒的多数を占める社会となり、出生率・人口増加率はともに北東部のそれより低い。更に南部を北東部と異なる環境にしたのは、高温多湿な気候と伝染病であった。特にヴァージニアの海岸部の住人に伝染病の影響が深刻で、20歳の男性の平均余命は30年弱、同じく20歳の女性の平均余命は約20年に過ぎなかった¹⁷⁾。

北東部への入植者が比較的均一な社会階層から成り立っていたのに対し、南部への入植者は騎士階級と年季奉公人という大変かけ離れた階層からの出身者たちだった。ミノワが示したヨーロッパの例に従うなら、これら二つの階層では「引退」して後の人生ということは認容されにくかった。共に働ける(戦える)間だけがその人の人生であり、働く能力を失えば1個の社会人としての地位まで失うとされた階層に属していたのである。

この慣習は必ずしも南部で老人が蔑まれていたという事を意味しない。政治参加など実際の活動を行っている老人は尊敬されていたし、それだけ

17) Darrett B. Rutman and Anita H. Rutman, "Of Agues and Fevers: Malaria in the Early Chesapeake," *William and Mary Quarterly*, 3rd ser., 33 (1976): 31-60; ..., *A Place in Time: Middlesex County, Virginia, 1650-1750* (New York, 1984); Maris A. Vinovskis, "Mortality Rates and Trends in Massachusetts before 1860," *Journal of Economic History* 32 (1972): 184-213.

でなく高位の役職（例えば植民地議会のメンバーなど）には高齢者が就くべきだと考えられていた。北東部の習慣と同じく、「息子」はいくつになっても「父親」が健在の間は家督を譲られる事はなかった。アメリカ植民地を4つの地域に大別し、そのそれぞれを民俗学的に考察したデイヴィッド・H・フィッシャー David Hackett Fischer によると、マサチューセッツとヴァージニアでは共に「年齢の嵩上げ age-heaping」が起きている。これは国勢調査（18世紀の段階では村や町の単位で行われた）の際に、一の位を切り上げて年齢を報告する現象である。だがマサチューセッツの人々は自身が高齢になってから「嵩上げ」を行うのに対し、ヴァージニア人は30歳代ですでに「嵩上げ」を始めていた。この相違は、マサチューセッツでは老齢が神からの徴として畏怖されたのに対し、ヴァージニアでは年長であることが重んじられたからであるとフィッシャーは推測している¹⁸⁾。

ヴァージニア有数のプランターであり、1744年には植民地議会の長に選ばれたウィリアム・バード2世 William Byrd II (1674-1744) が日誌に残した彼の晩年の生活は、ヴァージニアの老人の生活史として大変興味深い。まず目につくのが老人になっても衰えを見せない彼の公的かつ私的活動である。議長に選ばれたのは彼の生涯最後の年であったほか、60歳を過ぎても毎朝ギリシア語・ラテン語・ヘブライ語の勉強を続け、ダンスをし、女中に手を出した。そもそも彼が議長に選ばれたのが70歳の時、と非常に遅く見えるが、それは前任者のジェイムズ・ブレア James Blair が87歳で死去した時に最年長だったのがバードであったからで、ここでもヴァージニア人が高位の役職者は老人になるべきだと考えていたことが示される。

フィッシャーはこの大プランターの生活をヴァージニアで老人・老齢が非常に敬われていた例の一つとして挙げているが、その反面として、バードが老齢から来る体力の低下を理由に公職を辞退したり習い事をやめたりしたら、その結果として彼自身の政治家生命のみならず、家長としての権

18) Fischer, *Albion's Seed* 321-324.

威すら失ってしまうかも知れないという恐怖に駆られて様々な活動に精を出していたことも考えられる。ヴァージニア議会における彼の前任者ブレアも最後は議長席で居眠りをする体たらくだったようだが、それでも仕事を続けようとしていたのは彼らには引退して後の人生ということが想像もできなかったからではないだろうか。

第3章 年齢意識の転換

現代のアメリカ人は「若さ」に重きを置く。いくつになっても明るい色の服を着こなし、自動車を乗り回し、大統領候補たちも「老練」より「素朴」、「経験」より「理念」を強調する。「天使のような子供」「赤ん坊のように無垢」という表現が通用するのもまた現代である。たかだか40代半ばの人間が一国の政治を切り盛りするなどウィリアム・バードのような政治家にはとうてい承服できかねる事態だったであろうし、インクリース・マザーのように厳格なピューリタンは人間本性の根元的な堕落を信じていたため、回心体験すら告白していない幼児の魂は天使のようであるはずはない、と考えただろう。実際、ピューリタンであったサミュエル・スーウォール Samuel Sewall (1652-1730) は、彼女の娘の一人ベティが数ヶ月の間恐慌状態にあったことを日記に記している。彼女は *Ye shall seek me and shall not find me* (John 7:34), *Ye shall seek me and shall die in your sins* (John 8:21) など、キリストが改宗しようとしないユダヤ人たちに救済の望みが薄いことを説いている場面を説教で聞いているうちに、彼女の祈りは神に通じず、罪を抱えたまま地獄に堕ちねばならないだろうか、と思ひ悩むようになっていたのである¹⁹⁾。

アメリカ人の年齢意識はいつ頃からこのように変化したのだろうか。デ

19) Samuel Sewall, *Diary*, January 13, 1696 & May 3, 1696, as quoted in Alan Heimert & Andrew Delbanco, ed., *The Puritans in America: A Narrative Anthology* (Harvard UP, 1985) 283-284.

イヴィッド・フィッシャーは18世紀から19世紀への世紀転換期にこの変化が生じたと論じている。まず彼が根拠に挙げるのは定年制度の導入である。植民地時代のアメリカでは牧師たちが死の直前まで職務に励んだ事をはじめとして、教師、判事といった職業にも定年というものはなかった。植民地時代のアメリカ人は幼児と老人の間に知的かつ情緒的な差異を認めていなかったもので、加齢によって仕事における判断能力などが低下することなどを想定していなかったのである²⁰⁾。ところが、1777年にニュー・ヨーク州で判事に定年制度が制定されたのを皮切りに、1790年からアメリカの立法府は公職から退職すべき年齢を定め始めた。ジョン・アダムズらの反対にも関わらずこの新しい制度はまずニュー・ヨーク州におけると同様判事に対して適用され、その結果1820年までに9州が採用した²¹⁾。

また、フィッシャーは服装の変化にも着目する。彼によると、国勢調査で「年齢の嵩上げ」を行っていたアメリカ人は、黒一色の服を身にまとい、白髪を鬘を用いたり白粉を頭髮に振りかけるなどして、外見も実際より老けて見えるように心がけていた。ところが政治の世界での定年制度の導入と軌を一にして、アメリカ人は明色を服に用いるようになり、年齢相応、あるいは年齢以下に見えるようなファッションを好むようになったという²²⁾。このほか“fogy”という単語が元来老人に対する敬意・親しみを表現していたのに対し、1820頃から侮蔑語に変化していたこと、“fogy”は負傷した引退兵を意味したが、1830頃には否定的な意味合いの方が強くなっていたことなどを根拠に、フィッシャーはアメリカ人の年齢意識は合衆国の独立とともに革命を経たのだとしている²³⁾。こうした意識の変化は経済

20) Ross W. Beals, Jr., “In search of the Historical Child: Miniature Adulthood and Youth in Colonial America,” *American Quarterly* 27 (1975): 379-98. 南部における年齢意識の欠如についてはハワード・P・チュダコフ『年齢意識の社会学』（法政 UP, 1994年）12-17.

21) David Hackett Fischer, *Growing Old in America* (Oxford UP, 1978) 80.

22) Fischer, *Growing Old* 86-87.

23) Fischer, *Growing Old* 90.

的な結果をも生みだしており、19世紀初頭に長子相続の慣習が急速に崩壊し、長男と次男以下の資産に差が見られなくなった²⁴⁾。

かつて長命に神の恩寵の徴を見たピューリタンの教会にも同じ変化が忍び寄っていた。前述のグロスターを始め、マサチューセッツ州全体の教会で席順を決定する基準として年齢が顧慮されなくなっていたのである。変わって財産の多寡が重視されるようになっていたことを発見したロバート・ディンキンによると、この変化の始まりはアメリカの独立以前に遡り、1765年から1836年にかけてゆっくり進行した現象であるという²⁵⁾。

これまで年齢意識における「革命」の結果を述べてきたが、何がこうした変化を惹き起こしたのか。まず長い間信じられていた説として、平均寿命が伸びたため、老齢及び老齢の人の希少性が薄れた、というものがある。これはウィグルスワースが「証明」してしまったニュー・イングランド人の平均寿命の短さをそのまま前提とした説であり、20世紀半ばまで広く流布してきた。だが既に見たように、17世紀ニュー・イングランド人の成人は現代アメリカ人と大差ない平均余命を享受しており、老人が急激に希少性を失ったとは考えにくい。それに加えて、老人に対する尊敬の念と老人の希少性は互いに無関係であることは、平均寿命がもっと低かったはずの古典ギリシア時代にも老人が嘲笑された時代があったことから明らかである。

「近代化」が老人の相対的地位を低下させた、という考え方もある。「近代化」の厳密な定義は不可能であるが、一般的に産業革命による近代的工業が誕生し、近代的労働者という階層が析出し、こうした労働者の群れが都市を出現させ、人口の流動性が高まる結果、核家族化が進む一方で伝統

24) Fischer, *Growing Old* 98.

25) Robert J. Dinkin, "Provincial Massachusetts: A Deferential or a Democratic Society," unpubl. Ph. D. diss. Columbia U, 1968.

的農村共同体が崩壊する，こうした現象の総体を「近代化」と呼ぶことが多い。この説明では「近代的」労働者の誕生が「近代化」であるというトートロジーから逃れられないのだが，アメリカで産業革命が進行し，しかもフロンティアがアパラチアを越えて西進した19世紀の前半を近代化の時期と仮定しておく²⁶⁾。

「近代化」が老人にどのような影響を与えたか。近代的医療技術が発展したために老人が多く生存することになり，定年制度を導入することで高齢の労働者を「引退」させることが必要となった。都市化が若者を引きつけるために伝統的な農村共同体が崩壊し，老人は家長としての権威を失ってしまう。産業構造の変化の最大の犠牲者はまた老人であった。近代的な工場が出現すると職人の養成は工場内で行われるようになり，父から子へ，という技術の継承は少数派に転落する。さらに公教育の普及と文盲率の低下が，知識と知恵の源としての老人の地位を次第に脅かすようになった。これらの現象が互いに影響しあった結果が老人の地位の低下と，現代アメリカにおける若さ志向であった，というのが「近代化」論の大略である。

しかし，19世紀のアメリカでは常に資本と労働者は不足しており，長年技術を習得してきたであろう高齢労働者を，人余りを理由に定年に追い込んだとは考えにくい。それに一般にこうした「近代化」が老人の地位を低下させるとは言えない。日本でも明治維新の頃に「近代化」の洗礼を受けたと考えられているが，アメリカほど若さを尊重し，「老人らしさ」を忌避する文化に変化しているとは考えられない。これはほかの先進諸国においても同様である。しかもフィッシャーの研究によれば，アメリカでは「老齢」の地位の低下が早くも18世紀末には始まっていたので，この現象がアメリカ近代化の産物とは考えにくいのである。

26) Steven Hahn and Jonathan Prude, ed., *The Countryside in the Age of Capitalist Transformation: Essays in the Social History of Rural America* (U of North Carolina P, 1985).

ただし「近代化」と老人の地位の低下が全く関係ないとは言えない。やはりアメリカにおける老齡のあり方を研究したアンドルー・アチェンバウムは、医療技術の進歩は老人を余らせはしなかったかも知れないが、老齡・長命が持っていた神秘のヴェールをはぎ取るには充分だったと論じている²⁷⁾。もし植民地時代のアメリカ人がインクリース・マザーの説くように、神からの祝福として長命が授けられるのだと考えていたとしたら、医療と公衆衛生の発達は実に悲しむべき発見となっただろう。なぜなら近代医療に従えば、長い人生は救済に至る旅ではなくなり、ただ単にその人が衛生の観点から見て正しい生活を送ったか、ということに還元されてしまうからである。インクリース・マザーの息子、コットン・マザー Cotton Mather (1663-1728) は種痘の普及に努めたが、彼も天然痘の流行を人間に対する神罰の地位から単なる細菌の蔓延に引きずりおろす手助けをしたのだった。

この他、デイヴィッド・フィッシャーは政治的理念の変化に老人軽視の芽を看とっている。彼によると、植民地時代前半には新しく開拓を始めたばかりの環境で、フランス軍やインディアンなどの敵対勢力に囲まれるという軍事的・心理的・経済的困難に対処するために、イギリス系アメリカ植民地人は閉鎖的・集成的かつ権威主義的社会を形成していた。ところが植民地時代も末期になると英国本国との闘争の中から「平等」「自由」という概念が広く受け入れられ、これがアメリカにおける老齡の凋落を招いたとする。なぜなら「平等」の概念は年齢に基づく権威・特権も否定しきり、「自由」の概念は「共同体の基盤を揺るがすことで年齢が持つ権威を破壊した。それまでは老人の権力は集会的意識、つまり個人を家族、タウン、教会へと従属させることによって保たれていたからである。」²⁸⁾

27) W. Andrew Achenbaum, *Old Age in the New Land: The American Experience since 1790* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1978).

28) Fischer, *Growing Old* 109.

第4章 革命、覚醒、アルミニアニズム

新しく誕生したアメリカ合衆国に住む老人の地位の低下を招いたのは近代化や政治理念の変化だけだったのだろうか？ この最終章において、合衆国の独立が政治のみならず宗教思想にも与えた影響、そして宗教思想がアメリカ人の年齢意識に与えたかも知れない影響について考察する。

アメリカの宗教史には一定の間隔において宗教的熱狂が高まる時期が存在し、この時期を大覚醒（大いなる目覚め）と呼ぶ。植民地期から数えて5回の大覚醒を挙げる研究者もあるが、一般には18世紀前半の大覚醒と19世紀前半の第2次大覚醒だけが認められている。そして本稿の主題である年齢意識の変化に最も深く関与したと思われるのが後者である。1801年ネネシー州ケーン・リッジ Cane Ridge で開催された長老派の信仰復興集会が発端であったと言われるこの運動は、独立間もない合衆国で40年以上持続し、19世紀のアメリカ社会に多大な影響を与えた。宗派を問わず、神の絶対性・人間の根源的な堕落、それを救済する神の愛、を強調するのが共通点であった。

第2次大覚醒の特徴の一つはアルミニアニズム、あるいはパーフェクショニズムと呼ばれる思想の影響が色濃いことである。第2次大覚醒以前、ピューリタニズムが支配的だった合衆国北東部ではもちろんの事、英国国教会が多数派でありながらそれほど宗教には関与していなかった南部においてさえ、カルヴィニズムは前提として存在しており、人間が自ら救済を預定されているかは知ることができないとされていた。ましてやアダムスの原罪のために悪の本性をもって生まれてくる人間には、いかに罪を悔い改めたとして、自己の救済を実現する力はないと考えていたのである。それが19世紀に入るとアダムスが犯した罪と現在の自分を分離して考える風潮が現れ、回心体験を告白した者は再生した者と見なすようにまでなった。本来カルヴィニズムが内包していた救済者限定説 limited atonement も無

視して、すべて人間は自らの努力で完璧な存在になりうる力を持っているとしたのである²⁹⁾。

人間自体に救済実現への契機があると認めた19世紀のキリスト教徒たちはまた、アメリカ独立革命の申し子だった。ジョージ・ワシントン、トーマス・ジェファソンに代表される建国父祖たちが描いたアメリカ合衆国の政治理念は共和制に立脚していたのに対し、対イギリス本国との戦いの中で一般のアメリカ人が受け取ったメッセージは「すべての人は平等に創られている」という宣言の字義通りの解釈だった。権力の中枢から遠い人の耳に快いこのメッセージを敏感に捉えた一部の牧師たちは、これ以後「神の前の平等」という命題を極端にまで推し進めることになった。

この民主主義のキリスト教をよく体現したのが巡回説教師と呼ばれる人々である。独立革命の頃から彼らは人口密度が希薄で、かつ交通機関が未発達だったアメリカ合衆国を巡回し、行く先々で信仰復興集会を催した。彼らの大半は伝統的な神学部で聖職者としての訓練を受けておらず、粗野な聴衆に向かってこれまた粗野な語彙でもってメッセージを伝えていた。高齢かつ高名な牧師は必ずしも優れた説教師とは見なされず、神学の素養は少なくとも会衆を惹きつけられる人物がメソヂストとバプティストの教会を中心に説教師として登用されていた。アメリカ国民がこの新しい説教師たちをいかに熱狂的に受け入れたかはロレンゾ・ダウ Lorenzo Dow, イライアス・スミス Elias Smith らの活躍に明らかだが、さらに黒人説教師が台頭したことは、アメリカ革命から生まれた平等のレトリックが制約付きながら黒人にまで適用されつつあったことを伺わせる³⁰⁾。それ故、これら信仰復興集会においては説教を行う者と聴く者の間の質的差異は強調されず、一般信者も宗教的衝動を抑えずに済んだのである。一般信者が会

29) Nathan O. Hatch, *The Democratization of American Christianity* (Yale UP, 1989) 172.

30) Hatch 9-11, 128-133.

衆の前で次々に回心を告白する、いわば騒がしい信仰復興集会は、ライマン・ビーチャー Lyman Beecher (1775-1863) に代表される正統的な牧師からの批判を招いた。1637年から翌年にかけて行われたアン・ハッチンソン Anne Hutchinson の裁判以来、宗教的狂信 enthusiasm は社会の安寧を脅かすものとして、特に北東部の牧師たちに恐れられてきたからである³¹⁾。

しかしこれら民主主義時代の説教師たちはカルヴィニズムの伝統を否定していたわけではない。確かに彼らは無教育な者でも説教壇に迎え入れたが、これは誰が救済されることになっているのか、神意を人は知ることができないという預定説の原点に立ち返る動きでもあった。大覚醒運動を容れず、伝統的な教会の説教壇にしがみついていた守旧派のカルヴィニストに対して、「王」や「祭司」といった制度が神と人との間を遠ざけた、という批判を浴びせた民主主義の説教師たちは、しばしば「エヴァンジェリカル」という分類をされるが、カルヴィニズムの新たな動きであったとも言える。かくして、神と人との直接のつながりを回復することを目指して、複数の復古主義 restorationism が衝突することになった³²⁾。

過去の時代に理想像を求め、その理想への回帰を促すのが復古主義であるとしたら、第2次大覚醒の中でせめぎ合った復古主義が結局のところ伝統的共同体を破壊してしまったのは皮肉と言うほかない。「神の前の平等」と「個人の尊厳」を強調するあまり、国政のレベルで共和制を批判せざるを得なくなったほか、家庭においても伝統的な家父長制度と折り合わなくなった³³⁾。同じレトリックが宗教の世界においても中心となるべき権威を否定する方向に働いた。ひとくちに第2次大覚醒を彩ったエヴァンジェ

31) Hatch 18; Patricia Caldwell, *The Puritan Conversion Narrative: The beginnings of American Expression* (Cambridge UP, 1983) 34.

32) Hatch 167-9

33) Hatch 14, 32. 民主主義の説教師を研究したハッチは、ハーマン・ハズバンド Herman Husband という説教師が合衆国憲法起草者をヨハネの黙示録に登場する獣に譬えて非難した例を挙げている。これはまさにアメリカ植民地人がイギリスの植民地支配を排するときに利用したレトリックだった。

リカリズムと言っても、前述のビーチャーのごとく家柄・教育・経歴のすべてがそろった長老派の伝統的牧師が活躍する一方で、「怪しげな説教師 obscure preachers」を含む巡回牧師たちがビーチャーと同程度の権威をもって新しい国民にキリスト教を説いて回っていた。こうした中心的権威の不在という事態がまさに「平等」のレトリックの果実だった。

(a) カルヴィニストと回心

繰り返しになるが、共同体の紐帯が弱まることと老人の権威が低下することは必ずしも必然性を持った関係ではない。老齢がもっていた神秘性あるいは特権性を脅かす変化は回心体験のあり方に芽生えていた。

回心体験は一定の過程を経て行われる。まずそれは自分がいかに神の教えに背いて生きてきたかを回想することから始まる。次にそうした生活に対する疑問とやがて訪れるであろう神の審判への不安が述べられる。第3の段階に現れるのは悔恨の念と、自らの罪深さに与えられるであろう神の怒りに対する恐怖である。そして最後にはまったくキリスト教徒への生まれ変わり、罪深い自分をも救う神の無限の愛への期待が述べられる。この図式はアウグスティヌスの『告白』の時代から不変である。

17世紀のアメリカに渡ってきたピューリタンはしかし、最後の救済については実に自己抑制的だった。回心の最終段階に至っても、結局のところ神がその人を救われるのかどうか、回心を告白している本人にはわからない、という疑問はそのまま取り残されるのである。同じピューリタンでもイギリスに残ったピューリタンはもっと楽天的で、神の救いを確信することで回心体験の告白を終えるのだが、アメリカでは神の意志を勝手に忖度することはできない、救いの確信はカルヴィニズムに背く狂信でしかない、と考えていたのである³⁴。

この結果、アメリカのピューリタンの回心体験は生涯を通じて行われ

34) Caldwell 30-35.

る、継続的な心の働きとなった。ジョン・ウィンスロップ John Winthrop (1588-1649, マサチューセッツ湾植民地初代総督) ら著名なピューリタンの回心を研究したチャールズ・L・コーエン Charles L. Cohen によると、アダムの原罪のために人間は良いことを行う能力ばかりか真に悔い改める力さえ失っていると信じていた17世紀のピューリタンにとっては、回心体験は生まれ変わりの前の通過儀礼ではありえなかった。それはむしろ自らの罪深さ、それを改め得ない己れの弱さを繰り返し自覚し、神の怒りを受け入れ、そして最後は神の恩寵 grace に全て身を委ねるという神の絶対性を繰り返し確認する作業だった³⁵⁾。

1634年頃からウィンスロップは神学論争に巻き込まれる。アン・ハッチンソンに代表されるアンティノミアンの教義に反対し続けた彼は、いつしか植民地の中で孤立してしまう。ジョン・コットンら有力神学者の協力を得られないと気付いた彼は、日記に次のように記す。

Upon some differences in o^r Church about the waye of the Spirit of God in the worke of Justif [ication,] myselfe dissentinge from the reste of the brethren, I had occasion to examine mine owne estate, wherein the Lord wrought marveyloysly upon my heart, revivinge my former peace & consolatiō wth mucche increase & better assurance th[a]n formerly; & in the middest of it (for it continued many dayes) he did one tyme darte a beame of wrath into my soule, w^{ch} struck me to the heart, but then the Lord Jesus shewed himselfe & stood betweene that wrathe & my soule.

(神の義認の御業において聖霊が果たす役割に関して我々の教会に意見の相違が出来し、私はほかの兄弟たちとは意見を異にすることに

35) Charles Lloyd Cohen, *God's Caress: The Psychology of Puritan Religious Experience* (New York: Oxford UP, 1986).

なったため、私は自ら置かれている状況を見直すことにした。その時神が私の心に驚くべきみちからを示したまい、かつてに勝る確信で私がかつてもっていた平安と慰めを蘇らせたもうた。この出来事の真っ最中一というのはこの状態が何日も続いたからだが一神は一旦私の魂を怒りの光線で刺し貫かれた。この出来事は私の心に大いなる恐怖を与えた。だがこの時イエスが現れ、私の魂を神の怒りからかばって下さった。）

政争に敗れ、孤独を託っていたウィンスロップの魂は、イエスの愛を受けてむせび泣くかのである。

Oh how I was ravished wth his love! my prayers could breathe nothing but Christ & Love & Mercye, w^{ch} continued with meltinge & teares night and daye.

（ああ、私はかれの愛にどれだけ狂喜したことか！ 私はもはやキリストと愛と慈悲のことしか祈れなかった。私は涙と共に心が和らぐのを覚えつつ、日夜祈った³⁶⁾。）

ウィンスロップは自らの弱さを全て神にさらけ出すことによって神から（キリストを通じて）精神的な強さと愛を受け取り、自らの心の支えとしていたのである。当時40代半ばを過ぎたウィンスロップにとってこの回心体験はもちろん初めてのものではない。17世紀アメリカのピューリタンにとって回心体験とははなはだ個人的な行為であり、折りにふれて神との契約の再確認を繰り返す自省的な心の働きであった。自らの救済が約束され

36) Robert C. Winthrop, *Life and Letters of John Winthrop, Governor of the Massachusetts-Bay Colony at their Emigration to New England, 1630*, 2nd ed., 2 vols. (Boston, 1869) II, 161; Daniel Shea, *Spiritual Autobiography in Early America* (Princeton, 1968) 102, as quoted in Cohen 268.

ているのか知らされないままに、救済を求めて信仰を保つことを誓ったピューリタンの生涯は、不安・絶望・神の愛の再確認という行為の連続となっていたのだ。

(b) パーフェクショニストと回心

17世紀から19世紀に目を移すと、回心体験のあり方が全く異なっていることがわかる。主に若い人々が一生に1度だけ体験し、そして回心を体験できた者は救済を約束された真のキリスト教徒と見なされるに至る。人生は回心の繰り返し、という意義を失い、自省的な問いを繰り返してきた老キリスト教徒よりも劇的な回心体験を公衆の面前で示すことのできた若いキリスト教徒の方が救いに近い、という逆転現象が見られるのである。この民主主義の時代の回心体験を、第2次大覚醒の中心人物の一人にして「近代信仰復興運動の父」と呼ばれた長老派の牧師、チャールズ・グランディソン・フィニー Charles Grandison Finney (1792-1875) の自伝を通じて検討する。

フィニーの回想録、*Memoirs of Rev. Charles Grandison Finney* は、彼がどのような宗教体験を経て旧来のカルヴィニズムに疑問を抱くようになり、そして回心をしたか、そしてその後は説教師としていかに多くの人を回心に導いたか、を描いている。彼は15年間勤めたオバリン大学神学教授の職を1866年に退いた後も同地で死の直前まで布教と教育を続けたが、*Memoirs* は1868年の記述を最後としている³⁷⁾。

説教師としての活躍の記述が大半を占めるこの自伝を通じて明らかにされるのは、フィニーが当時のバプティスト教会に代表される狂信主義とは距離を置きながら、同時に同じ長老派であっても旧来のカルヴィニズムを説く“Old School”と呼ばれる牧師たちを非難していることである。まだ

37) Charles Grandison Finney, *Memoirs of Rev. Charles Grandison Finney, Written by Himself* (New York, 1876).

法律事務所に勤めていた1818年、フィニーはジョージ・W・ゲール George W. Gale に師事することでキリスト教に目覚め始める。だがフィニーはゲールの説く伝統的カルヴィニズム（フィニーは hyper-calvinism と呼んでいる）に触れるうちに、救済の御業において受動的でしかないはずの人間が救いを求めて改悛せねばならないとか、生身の人間が再生 regeneration するとはどういう事なのか、といった疑問を感じ始め、心を惑わせるようになる³⁸⁾。

1821年の秋、法律事務所に向かう途上、フィニーは内なる声に従って村はずれの森に入っていく。そこで彼はキリストの贖罪がすでに完成した業であること、故に救済は人間自らの業によってなされるのではなく、「受け取られるためにキリストから差し出されるもので、……私がせねばならないことは私の罪をすっかり放棄してキリストの受け入れに同意すること」であると悟るのである³⁹⁾。ここに至ってもなお、彼は自尊心がキリストの受け入れを拒んでいることを知る。森の中で救いを求めている姿を誰かに見られることを極度に恐れ、彼は祈りの声をあげることができない。人に見られることを恥じている自分が更に罪深い存在であると気付いた彼は絶望の淵に沈む。そしてついに彼は叫ぶ。

... I cried at the top of my voice, and exclaimed that I would not leave that place if all the men on earth and all the devils in hell surrounded me. "What," I said, "such a degraded sinners as I am, on my knees confessing my sins to the great and holy God; and ashamed to have any human being, and a sinner like myself, find me on my knees endeavoring to make my peace with my offended God!"

38) Finney 7-9.

39) Finney 14.

（私は全ての人間と地獄の悪魔が私を取り囲んでいたとしてもこの場所を離れないぞ、と声を限りに叫んだ。「偉大にして聖なる神に自分の罪を告白しながら、怒れる神を鎮めるために跪いて努力しているさまを人に見られることを恥じるとは、私は何という墮落した罪人なのか！」）⁴⁰⁾

ここに至って神はフィニーの祈りを聞き届け、森を出る時の彼はすでに福音伝道に携わることを決心しているのだが、この場面には第2次大覚醒での回心体験の要素が多く見てとれる。不安、絶望、そして回心という一定の段階を踏みつつも、それがごく短期間に行われていること、救済の業はあくまで神が行うものながら、人間はそれを受け入れさえすればよい、とすることでカルヴィニズムのくびきから自由になっていること、回心の際には祈りが口をついて出る、涙を流すなどの現象が伴うことである⁴¹⁾。

フィニーの回心体験をもう少し具体的に検討しよう。彼がいかに伝統的カルヴィニズムから脱却したかを知る上で、彼が「S氏」と呼んでいる理神論者の商人との対話が示唆に富む。このS氏は長老派の牧師である舅から指導を受けるのだが、どうしても預定説や「原罪」思想に納得がいかないため理神論を奉じている。回心しようとしないうS氏を心配した彼の妻がフィニーを招くのである。アダムの子孫にまで伝わり、そのため人間は神に従う能力さえ奪われているとは信じがたい、と詰め寄るS氏に、それらS氏が疑問に思っている教えは本来聖書の教えではなくて、教理問答書などを通じて後からキリスト教に忍び込んだ人の教えであるとフィニーは解き明かす。これを聞いたS氏は直ちに祈りを捧げ始め、涙を流して回心体験を得るのである⁴²⁾。

40) Finney 14-16.

41) 実際回心直前の彼は、「泣くことができない」事を回心が得られていない証左の一つとしている。Finney 13.

42) Finney 123-127.

このエピソードはフィニーが復古主義の伝統に立っていることのみならず、彼の年齢意識、すなわちフィニーと同じあるいは下の年代の人々は回心しやすいが、彼より上の人々の心は頑なな点があって、回心の妨げになると考えていることを物語る代表例でもある。フィニーは行く先々でS氏のように回心できない、あるいはしようとしていない人に出会うのだが、その多くはS氏のように「親」の世代が押しつける旧来のカルヴィニズムに飽き足らないか、バプティズムのような教えに捕らわれているかのどちらかである⁴³⁾。S氏と出会った町でフィニーはたまたまバプティストの教会と信者の争奪を行うことになるのだが、この時フィニーが獲得した回心者は若い人々であり、彼らの両親の多くはバプティスト教会の信者だった、と記されている⁴⁴⁾。

年輩の牧師の説教はしばしばフィニー自身の説教と対比される。伝統的なカルヴィニストなら当然なのだが、祈りを捧げて神から何ら答えを得ていないとする牧師にフィニーは軽蔑を隠さない。嘗ての師ゲールに招かれて出席した長老派の礼拝式でも、フィニーはすぐに退屈してしまう。

The meeting was opened by one of the elders, who read a chapter in the Bible, then a hymn, which they sung. After this he made a long prayer, or perhaps I should say an exhortation, or gave a narrative – I hardly know what to call it. He told the Lord how many years they had been holding that prayer-meeting weekly, and that no answer had been given to their prayers. He made such statements and confessions as greatly shocked me⁴⁵⁾.

(長老の一人が集会を始めた。彼は聖書の一章を読み、皆で賛美歌を

43) 両親が不熱心なために回心が得られない娘のエピソードなども見える。Finney 151-152.

44) Finney 128.

45) Finney 146.

歌った。それから彼は長い祈りを捧げたが、これは訓戒と言うべきか、それとも物語を語ったというのか、適当な言葉がない。彼らがいかに長い間毎週礼拝式を開いてきたか、それに対して神からは何の答えも与えられない、というような内容をこの長老は述べたが、この告白に私は驚いた。）

フィニーは立ち上がり、神から何の答えも得られない、回心体験もできない事を神のせいにするのは正しい礼拝式ではない、と会衆を叱りつける。するとこの礼拝式の参加者は皆回心を始めるのである。

... [T]he elder who was the principal man among them, and opened the meeting, bursting into tears, exclaimed, "Brother Finney, it is all true!" He fell upon his knees and wept aloud. This was the signal for a general breaking down.... They all wept, and confessed, and broke their hearts before God. This scene continued, I presume, for an hour; and a more thorough breaking down and confessions I have seldom witnessed⁴⁶⁾.

（彼らの指導者でこの礼拝式を始めた長老が涙を流して言った、「フィニー師よ、それは全て本当のことです！」彼は跪いて声をあげて泣いた。これが合図となって居合わせた人は皆泣き崩れた。彼らはみな泣き、告白し、神に心を披瀝してみせた。私が思うにこの情景は1時間ほども続いたろうか、これほど見事に人々が心をさらけ出し、告白したのは滅多に見たことがない。）

この集団告白を契機にフィニーはゲールまでも回心に導くのだが、フィニーが惹き起こす回心は公衆の面前で、時には多くの人が同時に告白する

46) Finney 147.

事から始まるという点で劇的である⁴⁷⁾。それだけに年輩の人間には参加しづらい思いもあったのではないだろうか。ほかの会衆から隠れてフィニーの説教を聞き、物陰で涙を流す老牧師のエピソードも紹介されているが、ジョン・ウィンスロップが晩年にいたって個人的な日記に回心を書き付けていたことと考え合わすと、フィニーの若年世代指向が判然とする⁴⁸⁾。

若者が主役となったフィニーの時代の回心体験は、年齢意識の変革にとって更に重要な特徴を有する。回心の各段階が急速に、ごく短期間に実現されることはすでに述べたが、その回心体験は一生に一回限りのものとして認識されていたことである。フィニーが布教活動を初めてまだ日が浅い頃、彼はブラウンヴィルという村にひと冬滞在し、そこで彼は地元の牧師の抵抗に遭う。具体的な記述は避けられているが、この牧師はたぶんフィニーが説く新しい「カルヴィニズム」に抵抗を感じて、フィニーが催す集会を欠席し続けたようである。フィニーに宿を提供した「B氏」という長老はこの地元牧師の親友で、伝統的カルヴィニズムの立場からフィニーに論争を仕掛けるのだが、結局はフィニーの前に跪き、告白をし、神の許しを乞うのである。フィニーはこの時のB氏を「新しい人間になった became a new man」と表現している⁴⁹⁾。別の回心者に対しては「彼女は(神の)王国に入った」という表現なども用いている。ウィンスロップとは異なり、一旦回心した人は完璧なキリスト教徒に生まれ変われるので、不安・絶望・神の愛の再確認という過程を繰り返す必要はないとフィニーは考えていたのである。

回心が1回限りの体験と考えられていたことは、次のエピソードによって更にはっきりするだろう。前出の商人S氏の妻はフィニーが現れる以前に回心体験を告白していた——だからこそ夫にも回心を促した——のだ

47) Finney 157.

48) Finney 131.

49) Finney 113.

が、夫や子供たちがフィニーの指導の下に劇的な回心を見せると、彼女は次第に自分の若い頃の回心は真の回心ではなかったのでは、と悩み出してしまふ。最後にはフィニーとの会話を通じて「自分は回心をしていた」という希望を取り戻すのだが、ここでフィニーは「彼女の希望を取り戻すこと to revive her hope」とのみ述べて、彼女が再び回心をしたとは表現しない⁵⁰⁾。

若者の方が回心を体験しやすい——フィニーに感化されやすいと言うべきだろうが——事に加えて、回心が継続的なものではないとしたら、かつてインクリース・マザーが老齢に求めた神秘性と救済の業における意義は失われてしまふ。若者の方が本来のキリスト教徒の姿に近く、従って救済にも近い。逆に回心体験のないままに歳を重ねた人間は、自らの罪を真に自覚せず、神に許しを乞うことをしなかったために最後の審判の際には地獄に行くことを運命づけられた失敗者であると見なされるに至るのである。

カルヴィニズムとは相容れないパーフェクショニズムという思想がアメリカ独立革命を境に蔓延したことが、それまでにアメリカ人が培っていた宗教的土壌を崩壊させるのに重要な役割を果たしたのは事実であろう。しかしパーフェクショニズムとインクリース・マザーはそれほど隔たった世界にいたのだろうか？ 77歳になったマザーが「その人の日を長からしめたのは神である」と誇らかに書き記したとき、彼は自分の救済に確信めいたものを感じていなかったろうか？ ならばパーフェクショニズムの浸透がすなわち老齢に秘められた価値を直ちに失わせるものではなかろう。マザーが己のパーフェクションを確信するためにはかれ自身の祈りの歳月が一種の証明として必要だったはずだからだ。フィニーや彼の同輩にあたる説教師たちがもたらした変革の内、加齢の意義に深刻な影響を与えたのは、従って、一回限りでしかも急激な回心体験を強調した点にあったのではないだろうか。

50) Finney 132.

結 語

アメリカという国全体で年齢意識が変化したにあたっては、単独の原因を分離することなど不可能であろう。また、この小論では回心体験のあり方の変化が関与した可能性を論じてきたが、回心体験の変化が年齢意識の変化に先行したかについて論証するにはもちろん至らない。年齢意識に改革が見られた時代に信仰の世界でもそれと軌を一にするような変化が見られた、というのがせいぜいここで許される表現である。

19世紀前半のアメリカには、パーフェクショニズムという新たな思想が力を得たと同時に、多くの宗教団体が復古主義を掲げてせめぎ合った。フィニーの運動でも見たように、過去のいずれの時代に「復古」の原点を置くかによって結局新しい思想運動をもたらした事例が多いが、宗教と年齢意識の関連を更に明らかにするには、これら多様な宗教伝統と回心体験の研究が不可欠である。また、加齢の延長上として死後の世界をどのように把握していたか、も加齢の意義付けには重要な要素と思われる。人間が最後の審判を待たずに完璧なキリスト教徒になれるものなら、死は「罪深いこの世からの最終的な解放」という積極的な意義、人生の一部としての重要性を失うはずだからだ。この小論ではこれら課題を提起するにとどめたい。